

A photograph of a large field of purple flowers, likely globe amaranth, with green foliage. The flowers are in various stages of bloom, and the field extends into the distance. The text is overlaid on the image.

パープル

第47号

高村昌憲個人誌

高村昌憲・個人誌 « *Takamura Masanori · Kojin-shi* »

詩

労働の精神 高村昌憲

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』（十四） 高村昌憲訳

四季

失われた春

月への夢想

ポートルランドの海に

評論

初期プロポ断想（三十） 高村昌憲

1 七十四人の歴史家

2 満ち潮と引き潮

3 移住民

4 猫と鼠

編集後記

夢の話をしようとする
現実が行進しているから
裏切られているばかりだと
宿酔した自己が躓く路地裏

やりたいことはあったのに
五年も経てば遙か遠くなり
労働の背後にあったのは国
命令に振り回された働き蟻

思えば好きでもないことばかり
好きとか嫌いとかの感情は無く
限り無く膨らむのは義務感ばかり
それが労働だと諦めて職場へ行く

何時も懸命に働くのは人のため
労働は自分のためではないから
美や創造の無い話ばかりで心は雨
折角の水溜まりも涸れてカラカラ

好きでもないことをして来たから
心の真髓から分かったことがある
好きなことなど最初から無いから
好きになるまで労働するのである

四季

軽い運動は自分を忘れさせてくれる
日々の時間が砂時計のように流れる
雛は巣で叫び 春には成長する
樹液は豊かにあり 葉を重くする
一輪の薔薇の花の良い香りが茂みに漂う
ナイチンゲールが直ぐに歌おうとしている
この水晶のような景色の隅に金色の雲が
よく響く歌声を震わせており
暗い樹木が夜そのものを映している

すべてのものが眠る 風は止み 葉の音もしない
美しい旋律の歌に目覚める 何という沈黙！
怠惰な大地は耳を立て そして目覚める
草はあらゆる活動の源になる穀物を育て
愛しい夜がそのかぐわしい香りを立てて
女性の髪の毛のような欲望に応えている

あなたは消えやすい炎が通ったように感じたの？
夏が陽気に前進し 裸足の両足を上げている

行け！ 日々は逃亡して決して戻らない
妖精の日々は踊る 異教徒の女たちの愛よ！

私があなたに奉納するのは
あなたが戻ってくるため
終りにしたくないのは幸福な金色のその日
私はそれを滑らせたまま 未来と呼んでいる
私の裸の夏はあなた 黒い船首が
玉虫色にきらきら光る果実のように割れるにしろ
あるいは青緑色の波のうねりと厳しい冬が
鋭い鋼鉄で緑色の海流を引き裂くにしろ
山頂の雪に似た海水の泡にしろ
あるいは水底の泥を大空へ昇らせるにしろ

それはあなた 私の美しい春！ 私の太陽？ あなたの髪
私の青い空？ それはあなたの両眼の静かな輝き
私のそよ風？ 私の両眼には大変に優しいあなたの息
私の秘密の小さな谷？ 細かな泡のあなたのくぼみ
金粉の上で一日が終るように そこに
あなたの香気に酔って赤くなった神が眠る

(ガブリエルへ 一九三〇年五月二〇日)

失われた春

あなたの両眼は私の夢が陥った明るい深淵
夢には夢で私の視線に報いている
あの世はそこに映るが決して入り込むことはない
それは身振りの一部 外の身振りが加わるのは
器用な両手の思い出によるもの
絹のように柔らかな布地で織られた襷によるもの
そしてあなたの言葉も正しく評価されて
教えられた話を全て関係のない世界の人に話し
その世界の装飾は空っぽであなたの魂はなく
旅行者となったあなたの魂は眼に見えずに存在する
私の両眼は 私が見る対象をとらえていない
あなたが昔のことを捜すようになると
私は過去に愛した私たちの道を再び通り
私の愛しい考えを 宝物となって集めている
巨大で明るい空虚が私の足の前に広がっている
私の精神は見えないものに注意深くなり
夢の空間にふわふわした塊のように漂う
稲妻のように砂浜の砂が現れてきて
あるいは現れるのは多分あなたの物思いに沈んだ額.....
荒野には日に焼けた黄金..... 果てしない大空の下の海
広大な海には短時間に直ぐに消える波
そこに突然と現れた波間にあなたの姿は消えていく

私に言え それは生きること？ 私たちは死んでいないの？
あの世のスチュクスの川から陰鬱な岸辺までを私たちに言うこと
それらの陰からあの世の陰のことを虚しく話しながら
思い出しかない崇められた幸福は
陰気な独白に似ていないのだろうか？

おゝ！ 生きること！ 生き生きとした未来の息を吸え
それらの指が伸びる方へ全てが香気に近づき
新しい未来に立ち上がり 花が咲き出すことを
両眼が思っている間に 両手が触れるのだ！
死んで生き返り 豊饒のものを手に入れるために
何時も張りつめた希望がそそり立っている
短時間のリラの花の後は薔薇の花の約束

そして百合の花が緑の葉によって聳えている
半分開いた愕を取り巻いているダイヤモンド
既に真珠色に輝く花冠が目覚めている
そして聖なる輪舞曲の中に季節が飛んでいる
私の両手の中にあるのは金色の果実で一杯の世界！

(ガブリエルへ 一九三〇年六月五日)

月への夢想

おゝ月よ 真珠色と薔薇色の優しい船
私の魂を癒してくれる神秘的な鏡
淡い夜に私の心もあなたのように昇っていく
あなたは止まって夢見る 私と一緒に
憂愁と優しい愛の約束をして駆け回る
沈黙している夢想家は慰められて待つ
あゝ鹿毛色の粉のような時間よ ここからは余りに遠い
その上更に遅くなれば あなたの視線も賛成するだろう

私が何時もの軌道に取り直した時
光の河の上に橋が架かっている
私がポプラの大木の下で後を追う時
一緒になったり離れたりする恋人同士は
仲直りと楽しい口喧嘩のイメージ
よく響く路地が突然に曲がると
大時計が明るい大空に現れるのを私は見る
同じ月が平原の空に浮かんでいる
私はゆっくりとした思考に戻るだろう
その道は私たちの抱き締めた姿を知っている
定刻になって眠るにも時々長い時間がかかり
眠るためには夜が終らないのを願うことだ
それは外の大通りを昇っていく月である
それは見知らぬ大地に近づいている夜である
物思いに耽った月が遠くの水平線で待つのは
広大な監獄の周りを回っている城壁と同じだ

「おゝ距離よ！ 非存在よ！ 物質でないことの障害よ！
明らかな深淵を私はあなたの魂の全てに突き刺した
あなたは何でもなく 私が保持したかったのは誓いだけ
私が戻ってくる時刻を待っているのも私
私だけの思考の虜になっているのも私だけ
あゝ！ 私の意志が沢山叶えられただけだ
最もだ！ それは酷い間違いだった
運命よ 私はあなたに従うがあなたは私には残酷だ
あなたの打撃は恐ろしい正義を倍加した
おゝ！ 自分の拷問を選択することの苦い意志よ！

単にそこまでだ！ あなたはもう遠くへ行かない！

それは独りで調整するのを望むことであり　そして
僅かな空間にも渦の全能とゆっくりとした潮の流れ
それはあなたが言ったこと　円を作って流れるように
その外のことはこれからのこと　既に済んだことでもある
原石の衝撃により広がっていく幾つもの波
無敵の法律によって事物は国家管理される
あなたは決心し望む　望むことをあなたは知っているの？
静かにせよ！　自然はあなたの願いを叶える
それ以上だ　小石は転がり　雪崩は滑って進む
全てが関係しており　全てが実現されねばならない
あなたはそれを認めたくないが　それを望んだのはあなただ
あなたが気に入ったことは美しい天使　気に入らなかったことは
並んで運命を大きくさせに出掛けること
こんな風にして毎日　毎月　毎々が回っている
おゝ月よ　あなたは変わりながら顔を取り戻す
このようにしてこの世の事物や人間たちが行くのは
何時も無謀な望みに従って満足させられるもの
何時も次々に起こる必要性の連続に不愉快にさせられるもの」

こんな風にあなたの心は銀色の月に話し
大空で大変に蒼白く蝕んでいるオパール
既に美しい円盤は欠けていき　恋人の心の中に
日々のゆっくりとした労働が描かれており
決して戻らない無敵の時間が描かれている
しかし祈りが生まれて思考する「私はあなたを愛した
私はあなたを愛する　私はあなたを愛するだろう
邪魔をしている雲を貫いて平然と再び生まれる月のように
何時も同じで確かでその法則は変わらない」

ガブリエルよ　私はあなたを愛する　あなたしか愛さない

(ガブリエルへ　一九三〇年六月一七日)

ポートランドの海に

葡萄酒色の海は巻きつき 巻き戻る
波のうねりのスカーフを黒い岩に投げながら
変化する織物の糸を取り戻しながら
銀色の縁を作り直しては解体させる
波は轟き 眩き そして自らにぶつかる

長い夜の間 そのようにして私は愛する
私の疑問と幸せと過去と未来は
強固な絶壁で轟いて眩きながら
際限なく押し出された波に転がっている
あなたには殆ど如何でもよい愛だが私には気に入っている！

唯一の水平線から私にやって来るもの全てが
陰鬱な後悔 狂ったような希望 理性の光
全てが私には気に入る 全てが白いレースのための糸
そのことを私に話すなら 悲しみに祝福あれ
それらの言葉を通して 私が理解するものよ！

それと同じ法則に従って唸って笑うあなた
おゝ海よ あなたはストライキの夕方に海を見る
不確かで物思いに耽って夢を追いかけて
金色の瞼に何色ものあなたの色彩が反射している
ストライキに漬かって眠そうな歌を真似て繰返して言え

涙になれ 動脈の中で脈打つ血液になれ
両眼を前にして深い神秘を全て映して見ろ
希望が生まれるように逃げて戻ってくる時
夕方の明るさの中で 足元に巻き戻るのは
あなたに永遠のものを生んでいる変わりやすい輪

その水の娘は自分を不貞と思った
何時もあなたは幽霊と同じであると見せてやれ
深い愛情にはゆっくりとした揺れがある
そしてあなたの波で 堪えきれない悲しみに溺れ
あなたの渦が描くのは巻きつかれた私たちの姿

(ポートランドのガブリエルのために 一九三〇年六月二四日)

1 七十四人の歴史家

七十四人の歴史家とは、アランが一九〇八年五月二五日のプロポを書いた頃にソルボンヌ大学にいた歴史の教授たちのことです。彼らは、歴史家として〈事実〉だけで満足しているとのことですが、歴史の事実とは何でしょうか。昔は人間だけを裁判に掛けたのではなく、動物や生命の無い物にも裁判したことを、古代ギリシアの歴史家ヘロドトス（前四八四頃～前四二五頃）は記しているとのこと。動物や物という〈事実〉が、裁判によって様々な罪が宣告されたのです。罪があるのか無いのか、あるいは重い罪か軽い罪か、全くの人間的解釈によって事実が変化したのです。歴史とは、事実の積み重ねであると信じられていますが、実は動物や物への裁判のように、事実は様々な解釈されて変えられているのです。人間に危害を加えた石を裁くためにも裁判が行われましたが、そのことについてアランは次の様に書いています。

「それは真実ではありません。石を裁くために、人間が裁判所に集まることであってはなりません」。そうです。そのことが書かれた本が十冊あっても、私の気持ちは決して動揺しません。全く、そんなにも遠くまで遡らなくても、周知の如く完全に空想の出来事を書く色々な新聞記事を十件示すのは難しいことではありません。ドレフュス事件から〈歴史の教訓〉を幾つも引き出すのは困難ですが、一つだけ歴史の良き教訓を取り出すことが出来ます。それは何よりも証言は疑ってかかることであり、次々に色々な意見を聞いて、私たちの見方を変えることです。」

このように書いて、証言の曖昧さを指摘しています。歴史の真実とは〈私たちの見方〉に係っているのです。更に、アランは歴史家に対して、幼稚園へ行くことを勧めて言います。

「幼稚園へ行ってご覧下さい。あなたはそこで屢々、純真な子供たちが小石とかベンチで傷付けられるのを見ます。小石やベンチを裁判に掛けて罰を与えよ、と言って下さい。あなたは馬鹿にされるでしょう」。

しかし、その歴史家は私（アラン）の眼の前で、それらのテキストを見せているのではないのでしょうか。私はそれらのテキストを嘲笑します。全く愚かな者たちが膨大な書物を書いているのは分かり切ったことです。もしも鼠が残されたものを全て食べて、一人の狂人の記憶を子孫に残したならば、彼の周りにはいる子供たちや大人たちを見て考えないで、その狂人が言うことを信じなければならぬのでしょうか。」

歴史家の書いた本とは、子供たちを傷付けた小石やベンチという事実を裁判に掛けて、その〈判決〉について述べているようなものです。事実の食べ残しを、歴史家という狂った鼠が全て食べるように、一人の狂人の記憶を浩瀚な著作として子孫に残したような〈歴史〉であるために、アランは嘲笑します。そうではなくて、事実の周りにはいる子供たちや大人たちを見ることであり、考えることです。そういうことをしないで、食べ残した事実だけを食べた狂人の言うことを信じることは出来ません。何故なら、小石やベンチを裁判に掛けているようなものであるからです。

多くの人々は、事実ばかりを信じないで、伝説というものも受け入れています。沢山の物語も

創られました。それらには人間が語られています。石によって危害を加えられた人間や、小石やベンチに傷付けられた子供たちが表されています。それらのものも歴史につけ加えるべきです。そういう努力を行わない歴史家は、人間を見たり考えたりしないために、ヒンズー教のような宗教や謝肉祭のような祭も見逃して仕舞います。宗教や祭は、歴史とも決して無縁でない筈です。つまり歴史は、市民と共に創られているのです。王の決断で歴史が創られている、と見る処に様々な狂気が生まれているのです。従って、歴史とは戦争の歴史である、との歪曲された歴史観が一世を風靡して来ます。戦争になれば為政者たちは、市民は動物であり武器という物であると見做します。決して市民を人間として見たり考えたりしません。歴史が〈事実〉にすり替わります。かくしてアランは、歴史を重視しませんでした。歴史が王という一人の人間によって創られて来たかの如き見方をする限り、そこに表れるのは物であり、動物であり、狂人であるからです。そこには市民が不在です。

何故なら、歴史をその根底で動かしたのは人間であり市民であるからです。従って歴史の本質とは、現代と密接に関係して来る見方であり思想であると言っても間違いはないと思います。歴史とは現代人と過去の人間との関係を見る見方であり思想である、と言っても過言ではありません。決して人間が食べ残した〈事実〉の羅列ではないのです。（完）

2 満ち潮と引き潮

〈楽観主義は意志のものである〉とアランは有名な『幸福論』の中で書いていますが、楽観主義者が意志によるにしても、美德によってより良く進化することとは別問題のように思われます。楽観主義者には悪人もおりますし、意志の強い者にも悪人はおります。一九〇八年五月二七日のプロポは、ある楽観主義者とアランの会話です。

ある楽観主義者が言います、「美德の方法を発見しようとして頭を絞っている間に、もっと大きな美点が自然に何事もなく導いて行ってくれます。高等動物が達した点や能力や、その構造の巧妙な複雑さが如何なるものかを見て下さい」。恰も高等動物が進化したのは、環境に合わせて自然に進化出来るが如くです。つまり、「進化は次第により良いものになっていくのです。先ず、孤独な人間は社会的人間によって潰されました。次に、集団は敵味方で戦いました。そして、勝手を齎すのは何時も精神力です。そこから私（楽観主義者）が理解するのは、人数が同じ軍隊であるなら、勝つのは最も勇気があって規律があり、他人のために自分の人生を与える気持ちを持っている人の数によるということです」と楽観主義者は続けて言います。

従って、人間の社会においてはエゴイストたちは虐殺されるか奴隷になり、他人のために寛大な者が支配者になり、「規則を、節度、簡素、大胆、尊敬、従順へ高めました」。子供は父親の経験を利用し、母親自身は子供たちの心を高潔であるように鍛え、必然的に子供たちは最良の未来へ行くのです。この楽観主義者にとって、人間はまさに時間と共に進歩して行くのであり、最新の姿である現代人が最も進化した人間ということになります。この観念は、実を言うと私たち現代人には根強く温存されています。昨日よりも今日、今日よりも明日はもっと良くならなければならない、という考え方です。〈日進月歩〉という言葉が大好きです。科学技術の発展が、人間そのものの能力や思想の進化と混同して仕舞うのです。列車で東京から大阪へ行くのに十時間かかっていたのが六時間になり、今では新幹線で行けば三時間もかからなくて行けるようになりました。将来はリニヤモーターカーで飛行機並みに一時間で行けるようになるのでしょうか。しかし、それが果たして進化でしょうか。果たして〈最良の未来〉でしょうか。

アランは答えて言います、「〈自然〉には気を付けなさい。譬え自然が長く此方側で眠っていたとしても、反対側でも横になっています。国民は美德によって保つのであり、それは良いことです。その様にして力を手に入れます、つまりローマ人が見てきたような平和です。しかし、成功はまさしく彼らを墮落させます。そこには富と平安があります。軍人精神を少しは必然的に忘れることにならないのでしょうか。彼らは最早、畑にいるように生きて行きません。饗宴や音楽や大変長い夜会を覚えるようになります。彼らの子供たちはもっと悪くなるでしょう。〈野蛮人〉は殆ど躰が教えられていない別の美德と、がさつな戦争の女神を彼らの馬の尻の上で齎すのを私は以前聞いています。恐らく奴隷に舞い戻ることなく、完全には乗り越えられない段階があります。大変な悪人が勝利者になれるのです。大変な美德の人も同じ様に勝利者になれるのです。海の潮の波を見てご覧なさい。毎日、高くなり低くなって何世紀も続いています。あなたが進歩と呼んでいるのは恐らく、上げ潮でしかありません。満ち潮の後には、引き潮です」。

明らかにアランは、右肩上がりの進歩という思想を信用していません。海の潮のように人間は〈毎日、高くなり低くなって何世紀も続いて〉いるのです。人間は科学技術のように、毎日確実に進歩して行きません。地球が自転して夜になったり昼になったりするように、同じことの繰り返しの中から平和を手に入れますが、それは墮落に繋がることもあり、〈そこには富と平安があります〉。裕福な者たちは最早、畑を耕して収穫する喜びを放擲します。怠惰な生活が高貴であると錯覚します。まさに人間として真の喜びを喪失した生活です。自らの意志によって主体的

に生きて生活することが不可能になり、子供たちは野蛮人と同じで、継続した美しい身振りである躰とも無縁になります。つまり野蛮人や幼稚な人間でも勝利者になれる社会が形成されて行きます。就中、〈大変な悪人〉が勝利者になれる社会が形成されて行きます。

例えば、憲法を遵守しなければならない為政者が、権勢にものを言わせる強国のお気に入りになろうとして、憲法解釈の変更という姑息な手段で自国の憲法を都合良く運用する者が勝利者になる社会もその一つと言えそうです。まさに〈大変な悪人〉であり、怪物と化した化け物に成ろうとする者でなくて何でしょうか。集团的自衛権を可能にしたいのなら、その正当性を説明して、改憲のために必要な所定の手続きを取って、しかるべき者に認められた後に運用すべきものであるのは自明なことです。〈しかるべき者〉とは、改憲の場合は国民が該当するのは当然であり、憲法第九十六条に定めた国民投票が行われてしかるべきであると思料されます。因みに、その条文は次のとおりですが、これらの手続きがとれないのなら、憲法は〈絵に描いた餅〉に過ぎなくなるでしょう。

「第九十六条 この憲法の改正は、各議院の総議員の三分の二以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならない。この承認には、特別の国民投票又は国会の定める選挙の際行はれる投票において、その過半数の賛成を必要とする。」

最終的に憲法改正の判断は、国民投票という形で国民が直接行うものです。従って最終的に国会や政府が判断すべきものでないのは明白ですから、仮に「安全保障関連法案」が国会で可決されて施行されても、この法律が合憲であるか否かを最高裁判所が速やかに判断すべきであることは必定であると思われます。何事も、満ち潮のように押し寄せでこり押しした後は、引き潮のように冷静に反省すべき時がやって来るものです。（完）

3 移住民

アランが十年前に、ある弁護士の講演を聴いた時の思い出を書いています。〈ユマニテ（人間性）〉についての話が次々に泉のように続きましたが、何を言いたいのか、何を立証したいのか分かりません。そのうちに移住民たちについての話になりました。

「彼（講演者）は放浪生活、羊の群、乾燥した平原、冬、夏のことを語りました。風、草、水の流れ、四季に従って人々は生活し、生きて行くのでした。彼も同じでした。聴衆も生きていました。彼らは勉強するためにそこにやって来た律義な人々でした。

移住民たちは、私たちのようには生きて来なかったと良く考えられています。彼らには、市民権、法律、警察、町、商業、工業もありませんでした。彼らは移住していたのであり、全てがそれで言い尽くされていました。ステップの高原で、地表が露出した荒涼とした大地の儘で、彼らは生きて行きました」とアランは、一九〇八年五月二六日のプロポで移住民について書いています。

ステップの高原を移住して生活している移住民たちには、家族以外の人間への働きかけは殆ど皆無に等しいのです。弁護士のように、人間を相手に立証することはありません。つまり移住民が相手にしているのは自然であり、事物です。羊の群も自然に含まれるものと見做せましますし、人間を相手に労働することはありません。この儘では社会も文明も稀薄になりますから、誰もが変化を考えます。移住民たちには定住することが求められます。放浪者が放浪を止める時です。「移住者たちは定住する時が来たのです」とその講演者の弁護士も、勇気を奮い起こして言いました。「聴衆はそれを聞いてほっとしました。新しい時代が始まって、文明が生まれて来るのは確かでした」とアランも書いています。定住すれば、人間と人間の接触が生まれます。人間と人間との関係が構築されます。そのことは文明には必須のようです。放浪する者たちからは文明が生まれぬのかもしれませんが、些か時代遅れになりつつある歴史観かもしれませんが、メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・黄河文明という世界四大文明も、確かにその土地に定住した者たちによって生まれています。放浪する者には、辛うじて孤独な文化しか生まれぬのかもしれませんが。

それでは、人間がいれば文化もあると言われていながら、何故その文化が文明という社会性や集団化に沿った優位性を獲得して発展し得なかった場合があったのでしょうか。歴史の敗者になって、勝者になれなかったのでしょうか。その点については、二〇世紀末になってジャレド・ダイヤモンドが『銃・病原菌・鉄』を書いて詳細に検証していますが、やはり定住化の問題を指摘しています。人間たちが定住するには、食料になる植物を栽培したり動物を育てたりしました。更に、大量の植物を育てるために野生種から飼育栽培種に改良しました。同様に、大量の動物を養うために家畜化し易い動物を選定し改良する必要がありました。やがて大量に生産することによって貯蔵が可能になり、文明の発展に寄与したのは自明です。因みに、世界三大穀物とは米・小麦・トウモロコシであり、大型草食動物の家畜としての「メジャーな五種」とは牛、羊、山羊、豚、馬です。

ダイヤモンドの分析は、進化生物学者として世界中の地域差も含めて詳細に調査していますが

、いみじくも凡そ百年前でありながらもアランの視点にはその先見性があったと言えます。同様に、ダイヤモンドの叙述に触れている中でアランの先見性を言うなら、車輪の発明です。人類の特筆すべき発明としてアランは、梃子や滑車と共に車輪を屢々挙げています。ダイヤモンドによれば、車輪は紀元前三千年頃に西南アジア付近で発明されたとのこと。時間が経てば人類は色々と工夫して、快適な乗物に改良して来ましたが、その基本的な車輪の原理は依然として現代の乗物の主要のものに変わりありません。自動車のタイヤや列車の車輪以上に経済的で効率的な現実的部品が無いのです。紀元前三千年前から人間の思考は殆ど変わらないことになる事例として、アランは良く引き合いに出しています。機械や道具の発明は、その知識の蓄積が可能ですから長い時間の中で改良を重ねて、確かにより良い物を産み出して来ました。それを進化と形容する人もいます。しかし、一人ひとりの人間の思考や表現などの能力が進化しているのでしょうか。現代の思想家は、古代の思想家よりも進化して優れているのでしょうか。アランは少なくとも否定的です。

従って、アランは古典を読むこと、それもその儘そっくり全てを読むことを勧めています。思想の要約書だけを読んで理解したつもりになっている愚行を指摘します。何故なら、少しでも速く走る列車に乗って目的地に到着することが、思想の目的では無いからです。早く着いた人間は何をするのでしょうか。余った時間で本を読むのでしょうか。それなら列車の中で読んでも構わない筈です。勿論、人と会う約束の時間が早くなる利点もあるでしょうが、その代わりに失うことも多くあるとアランは言います。速く行くことばかり考えないで、ゆっくり行くこともエネルギーの消費が少なく済むから大切であると言います。まさに現代社会におけるエコロジーの考え方です。

列車を動かすための基本的な考え方は、つまり車輪の原理は紀元前三千年と変わっていないのですから、古代の人々の考え方にも現代人が参考に出来るものは幾らでもある筈です。そのためには腰を落ち着かせることが肝心であり、移住民の儘であってはいけないのかもしれない。「人前で話すのが全てであるあなたは、移住民たちを信じてはいけません」と言って、アランはこのプロポを結んでいます。（完）

4 猫と鼠

猫と鼠について、アランは二幕物の芝居を書きます。幼稚園の運動場でのお話です。第一幕は次のとおりです。数日前から鼠が出るようです。管理人は町へ鼠捕り器を求めに行き、それを園内に仕掛けて鼠を捕まえました。すると本物の鼠を見ながらの授業が行われました。男の子たちには鼠の足、鼠の尻尾、鼠の眼という名前が付けられたり、そして他の動物の名を言うように質問され、二十日鼠、猫と言いました。次は、aの文字のつく言葉を言うようになりました。買い物籠 (abas)、オーヴェルニュ地方 (auvergnat)、足跡 (pas)、食事 (repas)、ヌガー (nougat)、背教者 (renégat) のような言葉です。そして次には野原 (prè) のように一音綴の言葉です。巢 (nid)、狼 (loup)、馬鹿 (sot)、円 (rond)、皿 (plat)、水差し (broc) があります。「要するに、その授業は授業としては馬鹿げています。只、単に動いている鼠がいて、皆が見ているだけです」とアランは書きます。

「そこへ不意に来たのが、管理人が連れて来た元気の良い猫です。右へ行ったり左へ行ったりして、匂いを嗅いだり聞いたり見たりしています。鼠捕り器と鼠に気付いて、腹這いになって待ち伏せます。その時、全く偶然に鼠は走って叫び始め、猫は孤立した兎のように逃げ出します。鼠の授業はそれで終わりです。」

次は第二幕です。この幼稚園の教育内容について視察に来た検査官の話です。少し長いですが、面白いのでその儘引用します。

「視察官は、一生懸命に全精力を使って小さな子供たちに話をさせます。「さあ、巻き毛の君、鼠とは何ですか」。その子供は天井を見ています。「鼠が何であるか君は知らないのかい」。その子供は隣の二人を見て、にこやかに笑っています。「さあ、答えを助けてやろう。鼠は、ど...」。その子供の顔に皺が寄ります。「鼠は、どう...」。子供は別のことを考えます。「鼠は、どうぶつです」。そして、次から次へ質問が続きます。「それは大きいですか、小さいですか。何を食べて生きていますか。鼠の敵は何ですか」。「猫です」と誰かが言います。何故なら猫と鼠については、子供らしいイメージと話があるからです。

「よろしい、さあさあ、猫と鼠が出会っているのを想像してみましょう」と検査官は言います。「何事もなく済むでしょうか。どちらかが怖がるでしょう。さあ、栗毛の坊やよ、怖がるのは猫ですか、鼠ですか」。「猫です」と子供は迷わず答えます。検査官は微笑します。「さあ、落ち着いて考えてご覧、坊や。はっきりと私の質問が分からないのだね。どちらが怖がりますか。さあ、赤毛の坊や」。「怖がるのは、猫です」。

視察官はそれ以上言いません。しかし、帰りがけに女性教師に言ったことは、猫についての授業がきちんと行われていないのは初めてのことであり、ということです。「お嬢さん、イメージと話だけでは経験に代えられないということは証明済みで、はっきりしていますよ」。

実際に、鼠から猫が逃げ出して行くのを目撃している子供たちにとって、猫と鼠が出会って怖がるのは猫だったのですから、決して答えは間違いでなかった筈です。ところが検査官にとって、猫は鼠よりも強くなければなりません。検査官の頭の中は、抽象化され、ステレオタイプ化されて固定化した答えしかなかったのです。現実には、数学のように決して抽象化されたもの

ではありません。最も抽象化された学問領域である数学は、〈一足す二は三〉であるように、答えは常に一つです。しかし現実の答えは、〈イマージュと話〉に抽象化されずに、一つではないことが沢山あります。検察官にとっての経験は、まさに〈イマージュと話〉によって抽象化された偽りの〈現実〉でしかなかったのです。縞馬が、百獣の王ライオンと戦って勝つこともあるのです。それが現実です。従って、猫が鼠の前から逃げ出すことは十分にあり得ることです。

ところが、あらゆる事物や人間の状況や現象を理解しようとして、現実を数学のように抽象化し普遍化しようと努めます。そこから知性による誤謬が発生して来ます。社会学の創始者と言われているコントは、最も抽象的な学問領域の数学から、次第に現実の領域が色濃くなっていく六つの学問領域を指摘しました。それは数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学の六つです。このコントの見方を援用してアランは、人間の知性による誤謬を指摘します。

数学は現実の複雑な影響を受けることが全くありませんから、人間が知性によって理解する上では極めて明瞭であり、容易でもあります。数学の考え方に基づいて、あらゆる社会現象や社会状況を数式や定理に押し当てれば、社会全体が理解出来ると錯覚します。あるいは例えば、生物学の仮説であるダーウィンの進化論を持ち出して来て、環境に対応して変化しない生物は絶滅するから、社会制度も時代と共に進化して変わる必要があると主張する政治家がいます。生物学と社会学を混同しているのです。現実の社会はそんなにも単純ではありません。況して進化論を短絡的に信じて社会制度を変えてばかりいけば、良くなるものも人々が疲弊して悪くなることは十分に考えられます。何故ならダーウィンの『種の起源』で論述している時間は非常に長く、政治家が論じているような短い時間の話ではないからです。知性に騙されてはいけません。長い時間をかけて生まれた結果を、恰も短時間にすり替えて可能にしようとする意志には、明らかに重大な誤謬が含まれていますし、庶民という国民を欺こうとする為政者の悪意すら感じられます。

あるいは自国の領土を越えた軍隊は、上官の命令に従う必要が無いようにすべきであると主張していたアランにとって、第一次世界大戦に参戦しながらも、軍隊とは実質的にあくまで防衛のみのためのものでした。従って、自国領土以外の地域が主な活動場所となる集団的自衛権の考え方は、現実の防衛方法の思想を越えた抽象的なものに違いなく、多くの誤謬が含まれているに違いありません。絶対的に力を持っているように見える数学の真理を、全ての学問領域に適用させるには、十分に吟味しなければなりませんし、必ず節度が必要です。全ての鼠は、全ての猫に決して逃げ出す訳ではないのです。社会の真実には必ず節度が必要です。（完）

◆八月七日（金）に発売された月刊雑誌『新潮』九月号の中から、小林秀雄が戦後程なく書いた「政治家」を購読した。一九四七（昭和二二）年八月七日付けの地方紙「九州タイムズ」に発表されたもので、大阪大学文学研究科准教授の斎藤理生（まさお）氏が、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されているブランゲ文庫のマイクロフィルムから今回発見したものとのことである。又これと併せて、「風狂の会」が登録している電子書籍の同人誌『風狂』にて、二〇一五年五月から北岡善寿氏が毎月執筆していて、五回目の九月に終了した評論「曰くつきの座談会から」〈<http://p.booklog.jp/book/93185/read>〉の中で述べている、一九四二（昭和十七）年七月二三・四日の両日に八時間に亘って行われた座談会「近代の超克」とも関係して読んだので、大変に興味深かった。何故なら、この座談会においては殆ど当時の政治について明確な感想や考え方を表していなかった小林が、敗戦二年後にこんなにも明確に政治や政治家への不信を語っているのを知って、今更ながら戦時中の沈黙が納得出来たからである。小林と言えども戦時中は自らの真の考え方や思想の表出が許されない雰囲気があったために、沈黙せざるを得なかったのであろうと理解出来るが、沈黙したがために失ったものも又多くあったに違いないと思う。「この政治という兇暴な怪物に食い殺されぬために、ぼく等は自己防衛の策を講じねばならなかった」と「政治家」の中で小林は言うが、その反省の意義は非常に大きい。何故なら、〈自己防衛の策〉とは沈黙でしかなかったからである。そして、「大政治家などというものは、もはや在り得ない」とも言う。つまり大政治家が生まれる国には民主主義が無いのである、と言っても過言ではない。しかしながら戦争中でありながらも、息子を病人にして軍隊へ入れなかった詩人や、軟弱であると言われながらも裸婦を描き続けた画家のように、小さな表現でありながらも真の表現を実践した芸術家がいいたのである。勿論、芸術家の表現方法は多様であり、又その優劣も時代と共に変容していくに違いない。しかしながら現代を正確に理解する上で、今後の小林の思想についての理解も「モオツアルト」や「実朝」などの他に、今回の「政治家」のような小さな自己表現者の側面にも注視して観ると、より一層幅広いものになり、現代の我が国の社会を思考する上でも有益ではないかと思う。

◆八月十三日（木）にアラン著『神々（下）』〈<http://p.booklog.jp/book/99683/read>〉をパブーの電子書籍にて発表した。七月に発表した『神々（上）』〈<http://p.booklog.jp/book/99643/read>〉と併せて全訳になる。アランが一九三三年（六十五歳）に執筆した作品である（刊行は一九三四年）。哲学の教師であったアランが、リセ（高等学校）のアンリ四世校を定年退職して執筆活動に専念した生活に入ってから、真っ先に書き上げたものの一冊と言って良い。二年後の一九三五年の七月から九月までに執筆した『わが思索のあと』（一九三六）の中で「慎重さと友情で溢れた『神々』の長い序文と受け取って頂くだけで十分です」（「宗教」）と書いている。つまり全生涯に亘っての『わが思索のあと』が〈序文〉の位置を占めるのに対して、アランにとって『神々』は〈本文〉に当たる作品であり、アランの全作品の中で最も難解なものでもあったようである。二十世紀当時までの西洋社会における神の問題は、現代の私たちの宗教の問題とも密接に関係して来るようである。取分け、イスラム教やキリスト教などの一神教にとって、神は眼

に見えてはならないものであるという教義が、多くの解決困難な争いの基調をなしている厄介な問題のように思えてならない。何故なら神は一つであるから、眼に見えるものは時間と共に変化せざるを得ないために一つである神にはなり得ない、という偶像崇拜禁止の教義とも関係していると考えからである。世界遺産を破壊する行為も、神は眼に見えないものであるから神に関係するものが眼に見えるのは、一神教の観念を極端なまでに信仰する者たちにとっては〈冒瀆的〉に映るのであろう。又、フランスの週刊誌「シャルリ・エブド」の編集部が二〇一五年一月七日にパリで襲撃されて、少なくとも十二名の死者を出した事件も、預言者ムハンマドなどを具象化して描いた一連のイスラム教諷刺画を挑発的とさえ見ていた人間たちがいたからでもある。いずれにしても宗教と関連した紛争や事件は枚挙に遑がない。アランの『神々』は、現代においても十分に読むのに価値ある作品であり、人間が宗教の困難な問題を超越するための一つの梃子の役割を担ってくれるだろうと思っている。

◆十月十八日（日）に千葉県松戸市在住の宿谷志郎氏ご夫妻のお宅を訪問した。一九九五（平成七）年四月三十日（日）に家族四人で訪問して以来であるから、二十年振りである。（宿谷氏は現在、電子書籍の同人誌『風狂』にエッセイ「美しい土地、美しい人」を連載中である。）今回は私独りで伺った。私が「秋山」駅の改札口を出ると、宿谷氏がスクーターで迎えに来てくれたので、びっくりした。私は「たまプラーザ」駅の自宅から持参した薩摩焼酎を荷台に載せて貰い、十五分間程のスロージョギングで、スクーターに遅れながらも伴走した。少し汗をかいた。お陰で、先ずは良く冷えたビールで乾杯したが、大変に美味しかった。ビールを飲む時は、やはり運動したり風呂に這入ったりして汗を流した後の一杯が旨い。その後は珍味であるマグロの尾の刺身、お手製の野菜炒め、私が持参した崎陽軒の焼売などを肴に、午後三時から五時半頃まで焼酎を飲みながらの会話を楽しんだ。何かのお祝いとかお見舞いなどという取り立てた目的があつての訪問ではない。お互いに、何しに来たのだろうか、何しに行ったのだろうか、と不信な思いを抱くこともない。会って自然に話がしたいだけの訪問なのである。思えば、最近はこの訪問が出来る友人もめっきり減った。青春の頃は、会って話をするだけで目的で良く行動したものである。相手が異性であれば、それも又懐かしい貴重な思い出である。将来の夢がある訳では無く、その時その時の思考と表現の時間が貴重であつたから、自然と〈淡きこと水の如し〉の関係になって行った。今から考えると、男性も女性もその様に特別の目的も無く会った人々からの印象が、実は最も強く残っていると言えるようだ。それが友人なのだろう。「イチゴにはイチゴの味があるように、人生には幸福の味がある」とアランは言っているが、旨い酒を飲みながら美味しい肴を食べ、楽しい会話が出来た友人がいることは、まさに幸福の味のように思える。幸福になるための秘訣は特段に何も無いが、敢えて言えば長く継続した気が置けない人と人との関係の中にあるのだろう。あるいは人と物との関係の中から発見されるのだろうと思う。決して身の程知らずの金銭や名誉を求める心の中には無いと言って間違いない。考えて見れば、宿谷氏との交わりは五十年以上であり、半世紀に及ぶ。お互いに妻よりも長いが、お互いに妻たちには強調しないことにしている。

◆「パープル」第四八号は、二〇一六年五月一日発行予定である。（完）

高村昌憲個人誌 パープル (第47号)

2015年11月登録

<http://p.booklog.jp/book/101047>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101047>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101047>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ